

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

トーゴ北部諸族の技術誌をめぐる諸問題：
パレオニグリティックを中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 和田, 正平 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004318

トーゴ北部諸族の技術誌をめぐる諸問題

——パレオニグリティックを中心に——

和田 正 平*

Some Problems of Ethnotechnology among “Montagnards
paléonigritiques” in Northern Togo

Shohei WADA

People classified as “montagnards paléonigritiques” inhabit the central area of the Atakora mountains: the Tamberma, the Kabrè, the Naudemba, the Lamba, and others.

J.-C. Froelich describes their cultural features, as follows: intensive agriculture, segmental organization, iron smelting, habitation, nakedness, and others. His definition of “montagnards” and “paléonigritiques” is not clear. But the existence of a third cultural zone of the mountain dwellers between the Guinea forest culture and the Sudan savannah culture can be accepted.

As mentioned by J.-C. Froelich, there are common cultural traits which exist among the people in the Atakora mountains, the Jos Plateau, the Mandara mountains, and the Nuba Hills. Although a common genealogical origin of these peoples cannot be proved, the origin of the African negro culture can be approached by examining the cultural features of the “montagnards paléonigritiques” from the perspective of technology. In this paper the author proposes an approach toward an analysis of the core of African negro culture, based on field research in Northern Togo from 1978 to 1979.

* 国立民族学博物館第3研究部

本稿は、昭和60年度、61年度、62年度にわたって行われた国立民族学博物館の共同研究「アフリカ諸民族の技術誌の整理と分析」（代表者・和田正平）の成果の一部である。なお、本研究にかかわる海外学術調査に関しては文末の付記を参照されたい。

- | | |
|------------------------|---------------|
| 1. はじめに | 2. 分節組織 |
| 2. パレオニグリティックの文化と民族の構成 | 3. 裸体性 |
| 1. 文化特性 | 4. 鍛冶師 |
| 2. 山地型の文化 | 5. その他の文化特性 |
| 3. 第3の文化 | 4. 北部トーゴの文化特性 |
| 3. パレオニグリティックの文化特性 | 1. 平地民の技術誌 |
| 1. 集約的農耕 | 2. 山地民の技術誌 |

1. はじめに

トーゴ国を南部と北部に地理的に区分するのは、ギニア湾に面する西アフリカ諸国のすべてに共通する地域特性に基づいている。湿潤なギニア湾から乾燥したサハラに向かって段階的に推移する西アフリカの気候帯は、通常、南部の赤道型気候と北部のスーダン型気候との対比として把握される。その気候区分に応じて植生もまた、G. P. マードックが概略的に示しているように、南部の熱帯あるいは亜熱帯雨林に対し、北部のサバンナが基本的な景観になり、生態学的な構図になる [MURDOCK 1959]。

だが、この気候的植生帯の推移は、トーゴとベニンでその秩序が乱れている。スーダン型気候の影響が海岸にまで及んでいるため、約2000マイルのギニア湾の海岸部がここでは森林でおおわれずにサバンナになっている。P. メルシェはこの東の中央アフリカ森林部と西のギニア森林部を切り離しているサバンナを「ベニン分離帯」(la trouée du Bénin) と呼んで、緯度的に推移する西アフリカの植生帯を海岸部からベニン (béninienne)、バウレ (baouléenne)、スーダン (Soudanienne)、サヘル (Sahélienne) と区分した [MERCIER 1954]。「ベニン分離帯」を重視したからである。すなわち、「ベニン分離帯」という環境が内陸と海岸の関係、及び両地域の民族分布に重大な影響を及ぼし、強大なダホメ王国の出現をもたらしたとみている。

「ベニン分離帯」がなぜ形成されたか、自然科学的な説明は困難であるが、同緯度の海岸部よりも雨量が少なく、山地を背後にした首都ロメでは、スーダン・サバンナと同じくらいの500~750ミリという低い雨量を記録する。雨林の形成がみられないかわりに、アブラヤシが植えられ、特徴のない叢林にバオバブのようなサバンナの樹木が出現する。住民は内陸から海岸に向かって触手のように突き出したサバンナの生態に適應して穀類も栽培する。こうした植生に対応する栽培植物の分布は、モルガンとピユの西アフリカ研究によって明示され、「ベニン分離帯」は穀作、根栽混合地帯に位

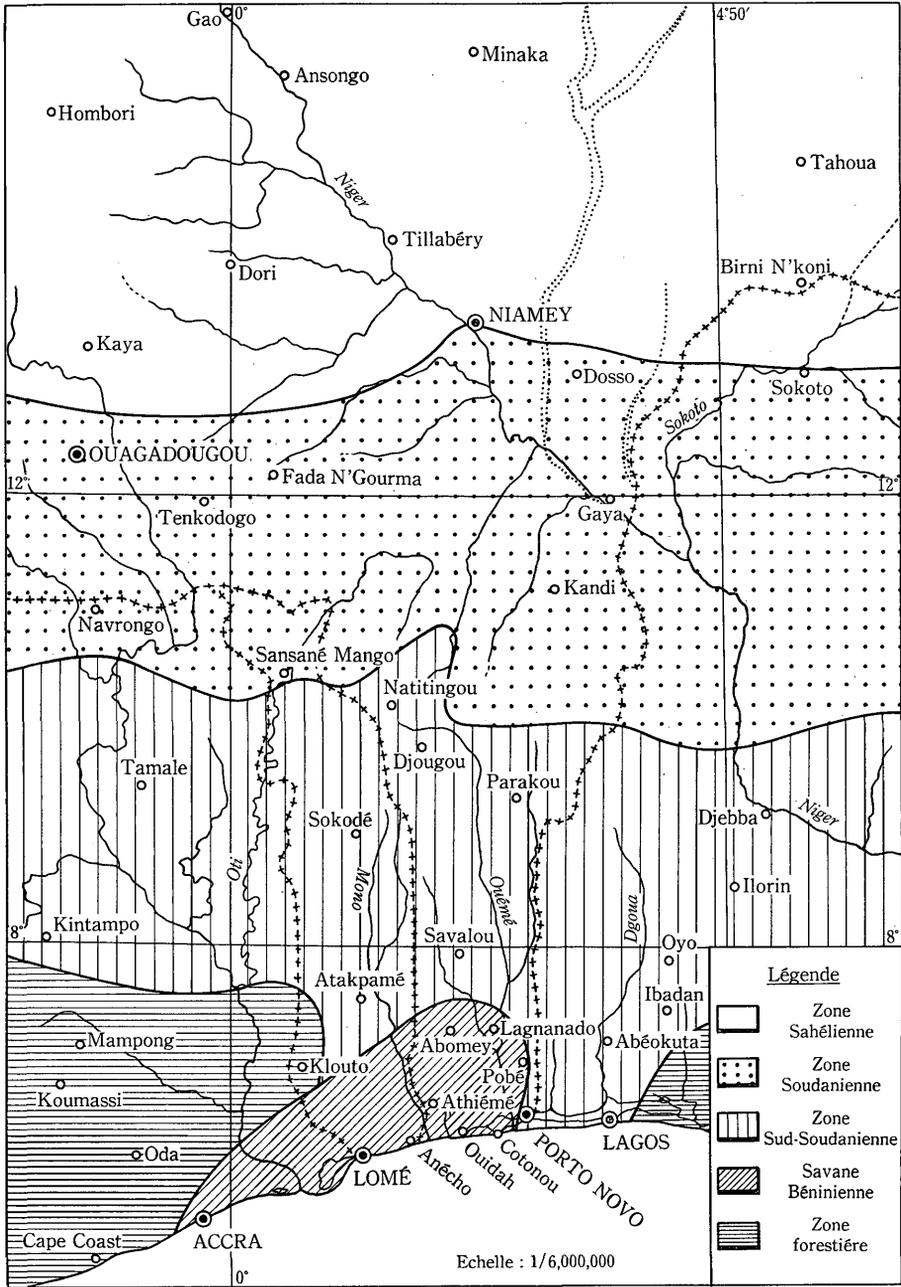


図1 ベニン分離帯 (Savane Béninienne) [MERCIER 1954] による

置づけられた。[MORGAN & PUGH 1964]。

しかしながら、「ベニン分離帯」は地理的には明らかに南部に所属する。栽培作物が北部のミレット (Burlush millet), ソルガム (Guinea corn), フォニオ (Fonio) 等の穀作と南部のマニオク (Manioc), ヤムイモ (Yam), タロイモ (Taro) 等の根裁類の作付と対比されたとき、「ベニン分離帯」は穀作よりはむしろイモ類の栽培が主流になる。

1968年、乾燥サバンナから湿潤な雨林へ移行する植生の変化を観察した中尾佐助氏は、栽培植物の分布とそれに対応する農耕技術の変化に注目し、西アフリカの農業システムが北部の「スーダン農耕文化」(Sudan Complex)と南部の「ギニア農耕文化」(Guinean Complex)の2つに区分できるというかなり明快な結論を提示した [中尾1969]。かれの所説の中では「ベニン分離帯」の存在は言及されていないが、とうぜん「ギニア農耕文化」に包摂されるものである。西アフリカを南・北に2大区分すればその通りであるが、しかし、「ベニン分離帯」は「ギニア農耕文化」の中に一括して扱えない文化的な意味あいをもっている。K. ポランニーによると、穀作ができる「ベニン分離帯」では、余剰食料の生産が可能になり、特別、資源のないダホメ王国でも、人口を増大させ、奴隷貿易に着手できたという [ポランニー 1975]。それは北部住民には重大な恐怖の出現になり、後に詳述するパレオグリティック山地民をより防禦的に山奥に潜入させる大きな圧力になった。文化的には、ダホメ王国は「ギニア農耕文化」に咲いたあだ花であり、ベニン、オヨ、アシャンティ等の森林王国等がうっそうと茂った雨林によって海岸から独立を維持していたのに、分離帯に興ったこの国は、奴隷貿易港と直接結びつくことになった。

すなわち、15世紀以降、外交と交易を通してヨーロッパ人との接触がはじまったギニア湾岸部では、煉瓦工、石工、大工、鍛冶師等を含むヨーロッパ人の上陸によって、社会的に有益な知識や技術がもたらされた。しかし、やがて、新大陸で砂糖とタバコによるプランテーションが発達すると、多大の労働力の供給が要求され、「ベニン分離帯」は奴隷海岸の異名をとるほど西アフリカの一大奴隷供給地にかわっていったのである。当時、ギニア湾岸では、金属加工法 (失蠟法)、象牙細工、ラフィア細工、土器製作等の伝統技術は頂点に達していたが、銃、火薬、銅、金物、絹織物、ガラス玉、ビーズ等が奴隷との交換で輸入され、伝統的な文化項目にインドやヨーロッパ等の新しい文化要素が導入されていった。これに対し、内陸奥地の西スーダンでは、ガーナ、マリ、ソンガイの黒人諸国家が興亡した後、15世紀以降、サバンナにはハウサ、グルマ、フルベ、モシ、バリバ等のイスラム化した小国家群が形成された。壮大なモ

スクの建設，イスラム王権の樹立，騎馬戦士の養成，イスラム服の着用，皮革加工，織物と染色の発達等々，イスラム化したスーダン国家の文化が普及し，しだいに南部の森林部へ拡大していった。

こうした南部ギニア森林部と北部サバンナ帯の文化的対比は，すでに1924年，M. ハースコヴィッツのアフリカ文化領域論によって「ギニア文化領域」と「スーダン文化領域」として設定されていた [HERSKOVITS 1924]。問題はそこで取り上げられなかった「ベニン分離帯」と「ダホメ王国」を文化的にどのように位置づけるかにある。南部諸族と北部諸族，ギニア農耕とスーダン農耕，森林とサバンナといった顕著な対照性を前提に，「ベニン分離帯」を独立した歴史舞台として評価し，ダホメ王国の北部諸族にあたえた影響を検討しなければならない。ダホメ王国は集権的な政治組織の中に奴隷狩団を編成し，サバンナ北部地方へ侵攻した。弱小部族は難をのがれ山岳地帯に逼塞し，対外的な接触を断った。こうした避難民たちは，南北二大対比論の中では北部諸族に包摂される。が，しかし，山岳地にかくれ，閉鎖的な社会を構成したので開放的なサバンナに住む平地民とは異なる特殊な文化形態を維持した可能性が強い。

フランスの民族学者 J.-C. フレーリッヒは，トーゴ，カメルーン等の現地調査から，山地に潜入した弱小諸族の文化にアルカイックの性格をみた。かれらはどちらかといえば，北部諸族に言及されるが，平地サバンナには住まない山地民である。トーゴでは北緯10度線をはさんで隆起しているアタコラ連山の中に居住している。大規模な造化の戯れのせいも，西アフリカでは海拔高度の高いナイジェリアのジョス高原 (Jos)，カメルーンのマンダラ山地 (Mandara)，スーダンのヌバ丘陵 (Nuba) 等はすべてアタコラ山脈とほぼ同緯度の位置に並んでおり，同様に避難民の隠れ家になっている。避難民が発生した歴史状況は，かならずしも一致しているわけではないが，これらの山岳や丘陵地帯にはアタコラ山脈と相重なるいくつかの重要な文化特性が看取される。

アタコラ山脈では，いつもの弱小部族が統合されることもなく散村形態で分布しており，社会組織は未発達で，もっとも重要な単位は家族であり，政治首長の存在は認められない。だが，農耕技術は巧智で集約的な農耕を営んでいる。ただ，不思議なことに裸体か素朴な褌で生活していて，衣文化としては原始生活を想起させる。フレーリッヒはこうした南部ギニア，北部スーダンのどちらにも属さないアタコラ山地の文化をパレオニグリティック¹⁾と呼んで「第3の文化」と設定した [FROELICH 1964]。

1) フランス語のパレオニグリティック (paléonigritiques) は，通常は形容詞であるが，パウマンは，民族学の専門用語として名詞的にも用いている。フレーリッヒもまた，この用語法をそのまま踏襲したと考えられる。

ギニア湾に面する国々で、トーゴと同じように北緯10度線に大きく隆起した標高差のある地形をもつ国々では、アタコラ山地と同様に「第3の文化」の存在が認められる。その文化的共通性は単に避難民による山地適応の結果と考えると解明できない面があり、起源的に古さが感じられ、アルカイックな面でのかわりあい予想させる部分がある。パレオニグリティックという発想もそこから生まれた。つまり、パレオニグリティックの概念は時間的にも空間的にもアフリカ全体に広がっている。そこで、具体的にアタコラ山地のパレオニグリティックを問題にする前に、この概念と用語に関して全体的な検討しておく必要がある。

2. パレオニグリティックの文化と民族の構成

1. 文化特性

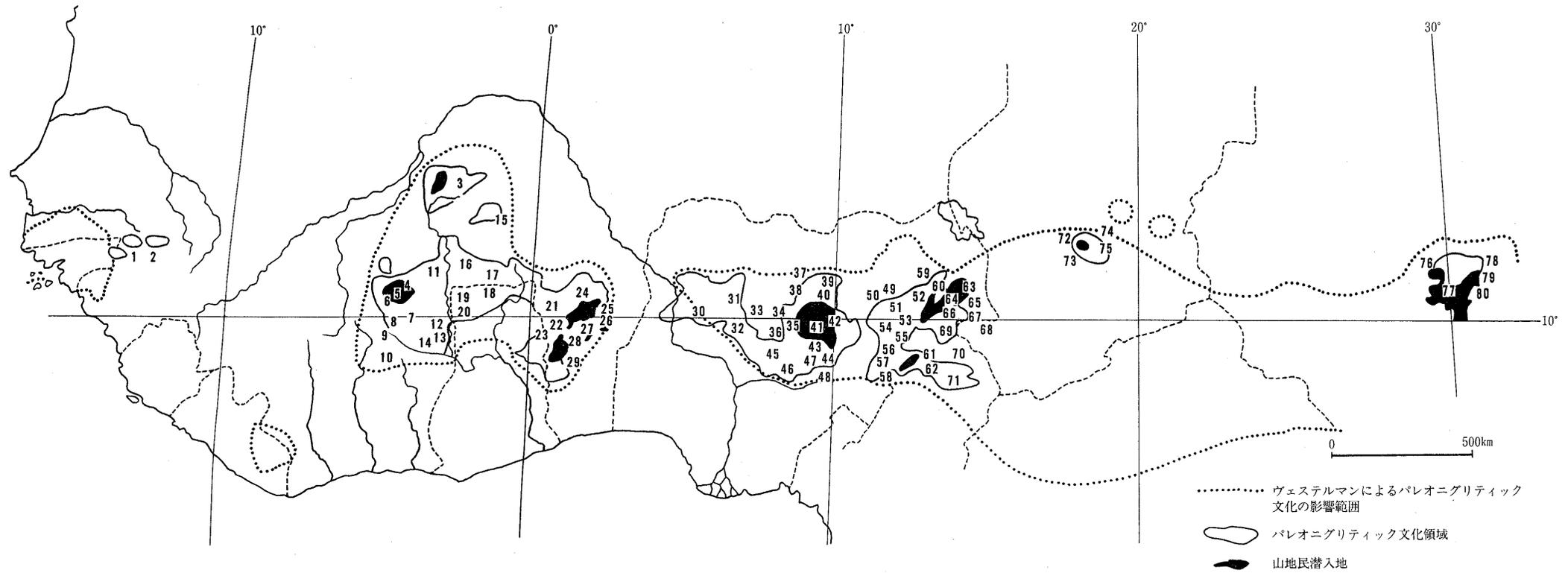
まず、「パレオニグリティック」とは、今世紀初頭、ドイツ民族学において初めて使用された用語である。言葉は文字通り、古代ニグロ人種をさして西スーダン地方のもっとも古い文化形態を暗示しているが、用語に専門的な意味をあたえたのは、H. バウマン (1902-72) である。

アフリカ大陸をフィールドに歴史民族学を構築しようとしたバウマンも、最初は、単に西スーダンで製作された素朴な装身具、楽器、飾りひょうたん等に注目して、アフリカの古代的文化要素の発見につとめたが、よき僚友、D. ヴェステルマンとの共同研究を通して、より広範な文化項目を掲げて、パレオニグリティック文化論を展開することが可能になった。これら2人のドイツ人学者は、現存する西スーダン諸族の中に古代アフリカの文化要素の一部がほとんどそのまま保持されているという点で見解が一致していた。そして、そうしたパレオニグリティックの文化をもった諸族は、セネガルからコルドファン（スーダン）までのサバンナの近づきたい山岳地帯に分布していると想定された。

パレオニグリティックの文化特性とは、

- a) 共有の意識、共同生活
- b) 祖先儀礼
- c) 集約的農耕、男性労働
- d) 裸体、ふんどし、皮片や葉茎の陰部覆い
- e) 割礼なし、抜歯、傷痕の慣習
- f) 円形住居、円錐屋根、板の寝台

- | | | | | | | | | | |
|----------------------|-------------|-------------|------------|---------------|-------------|--|-----------------|--|--|
| GROUPE NORD-CAMEROUN | | | | GROUPE TCHAD | | | GROUPE KORDOFAN | | |
| 49. BABUR | 56. BATA | 63. MATAKAM | 70. DAMA | 72. KANGA | 76. NYIMANG | | | | |
| 50. TERA | 57. TCHAMBA | 64. KAPSIKI | 71. DOUROU | 73. DIONGOR | 77. MIRI | | | | |
| 51. LONGUDA | 58. DAKA | 65. MOFOU | | 74. DANGALÉAT | 78. KOALIB | | | | |
| 52. HONA | 59. HIGI | 66. DABA | | 75. BIDIO | 79. HEÏBAN | | | | |
| 53. WAJA | 60. MARGI | 67. HINA | | | 80. LOTORO | | | | |
| 54. TANGALE | 61. DOAYO | 68. GUIDAR | | | | | | | |
| 55. TCHAM | 62. VOKO | 69. FALI | | | | | | | |



GROUPE FOUTA-DJALON

- 1. CONIAGUI
- 2. BASSARI

GROUPE VOLTAÏQUE

- | | | |
|-------------|---------------|--------------|
| 3. DOGON | 10. SÉNOUFO | 17. KASSÉNA |
| 4. TOUSSIAN | 11. KIËFO | 18. SISSALA |
| 5. SAMO | 12. BIRIFOR | 19. DAGARI |
| 6. TOURKA | 13. LOBI | 20. WALA |
| 7. DOROSIÉ | 14. LORO | 21. MOBA |
| 8. KOMONO | 15. KOUROUMBA | 22. LAMBA |
| 9. GOUIN | 16. GOUROUNSI | 23. KONKOMBA |

GROUPE NIGÉRIEN

- | | | | |
|-------------|-------------|------------|--------------|
| 24. BERBA | 30. KAMBÉRA | 37. BUTA | 44. ANGAS |
| 25. NANUMBA | 31. KANUKU | 38. MAGUZA | 45. AFO |
| 26. SOMBA | 32. GWARI | 39. WARJA | 46. GWANDARA |
| 27. NAUDÉBA | 33. KAJE | 40. RUKUBA | 47. SURA |
| 28. KABRÉ | 34. KATAB | 41. BIROM | 48. ANKWE |
| 29. AKÉBOU | 35. IRIGWE | 42. JARA | |
| | 36. KAGORO | 43. BARON | |

[FROELICH 1968] より

図2 パレオニグティック文化領域

- g) 杭の上に建てられた穀倉
- h) 鍛冶師への威怖、鉄製品の儀礼的役割、ふいごの木製送風管、土製高炉
- i) 簡単な弓、鉄製鏃、護身用杖
- j) 社会組織：長老が土地を宗教的に支配する、土地儀礼、集団のトーテミズム、人間—動物関係
- k) 天空の神の祭りよりも祖先の祭りのほうが重要であること
- l) 天空に関する神話に乏しい。人類最初の間人は、助言者であり、偉大な祖先でもある。この最初の間人は、岩壁からか、沼沢からか、洞窟からも出てきた。かれは祖先の生まれかわりである。
- m) 雨乞師の存在、地神に対する黒色動物の犠牲、聖なる木、男根の祭壇、死者の再生と結びついた祖先祭祀
- n) 死の起源に関する神話
- o) 貧しい芸術性

の15項目である。

以上は、すべてパウマンの研究に原拠してフレリッヒが列挙したパレオニグリティックの文化特性である。言語特性があげられていないのは、現在のパレオニグリティックには明瞭な言語的共通性が発見できなかったからであろう。

民族移動にともない、それまで使用していた言語が勢力を失い、完全に他の言語に入れ替わる例は珍しいことではない。現在、パレオニグリティックと呼ばれる諸族は、言語的にはニジェール・コンゴ語族の 1)大西洋岸諸語 2)グル諸語 (ヴォルタ諸語) 3)ベヌエ・コンゴ諸語、アフロ・アジア語族の4)チャド諸語、コルドファン語族の5)コアリブ諸語、に分類されている。パレオニグリティックとしての言語はなく、祖語を想定することも困難である。だが、主として西アフリカに分布する諸語をスーダン諸語として名付けたヴェステルマンは、パレオニグリティック文化の影響範囲をスーダン・ベルトに沿ってかなり大巾に想定している(図2参照)。上記の15文化項目にしても熱帯に居住するニグロイドに広い範囲に適応できる内容になっている。これは、パレオニグリティックが言語としては消滅したけれど、文化は広範囲にわたって大きな影響を残したことを意味している。もしアフリカにおけるニグロイドの起源が明らかにされたならば、現存するアフリカ諸族の文化からパレオニグリティックの文化項目を確認することも可能になるだろう。

しかしながら、考古学的発見をのぞいてアフリカ文化の古代要素は解明されず、ほとんど未知のまま残されている。パウマンやヴェステルマンが掲げたパレオニグリテ

ティックの15の文化項目も民族文化史的な推論にすぎない。だが、それにもかかわらず、パレオニグリティック文化の存在は民族誌的に根拠のない空理空論ではない。部族社会を対象にした構造＝機能分析が民族学研究の主流になった1950年代、フレーリッヒは逆に不当に軽視された文化圏説，文化領域論に学問的意義をあたえるフィールド・ワークの成果を発表した。

2. 山地型の文化

フレーリッヒによると、パレオニグリティックとは基本的に山地民であり、避難民としての性格をもっている。弱小部族が潜入した地域としては、

- 1) セネガル東南から国境を越えてギニア北部にまたがるタンゲ(Tamgue)山地
- 2) マリ，バンディアガラ (Bandiagara) 断崖
- 3) ブルキナ・ファソ南部から国境を越え，ガーナの北端部及び北西部につらなり，そしてコート・ジボアールへ続く広い丘陵地
- 4) ベニンからトーゴを南西にはしり，ガーナにいたるアタコラ (Atakora) 山脈
- 5) ナイジェリア中部，ジョス (Jos) 高原
- 6) ナイジェリア東部のゴテル (Gotel) 山地とシェブシ (Shebshi) 山地からカメルーン北部のマンダラ (Mandara) 山地まで
- 7) チャドの中南部，ゲラ (Guera) 山地
- 8) スーダン，コルドファン地方のヌバ (Nuba) 山地

等があげられている。

フレーリッヒにしたがうと，これらの諸地域は現在，何らかの意味で，パレオニグリティックの存在に関連する文化領域であり，系統別に民族構成を示すとつぎの通りである。

1. テンダ・グループ (Groupe tenda)
 - 1) セネガル，ギニア：バッサリ (Bassari)，コニアグイ (Coniagui)
2. ヴォルタ・グループ (Groupe voltaïque)
 - 1) マリ：ドゴン (Dogon)
 - 2) ブルキナ・ファソ：グルンシ (Grunshi)，カセナ (Kasséna)，キエホ (Kièfo)
 - 3) ガーナ：ダガリ (Dagari)，シッサラ (Sissala)，トゥルカ (Turka)
 - 4) コート・ジボアール：ロビ (Lobi)，ロロ (Loro)，ビリフォール (Birifor)，トウシアン (Toussian)，サモ (Samo)，ドロシエ (Dorosié)，コモノ (Komonono)，グイン (Gouin)，セヌフォ (Sénoufo)

- 5) ベニン：ソンバ (Somba), ナヌムバ (Nanumba)
 - 6) トーゴ：カブレ (Kabré), モバ (Moba), タンベルマ (Tamberma), ランバ (Lamba), ナウデンバ (Naoudémba)
3. ナイジェリア・グループ (Groupe nigérian)
- 1) ナイジェリア中部：ビロム (Biom), バロン (Baron), ルクバ (Rukuba), ジャラ (Jara), アンガス (Angas), ワルジャ (Warja), ブタ (Buta), マグザ (Maguza), カタブ (Katab), イリグウェ (Irigwe), カゴロ (Kagoro), アフォ (Afo), グワンダラ (Gwandara), スラ (Sura), アンクウェ (Ankwe)
 - 2) ナイジェリア中西部：カンベラ (Kambéra), カヌク (Kanuku), グワリ (Gwari), カジェ (Kaje)
4. 北カメルーン・グループ (Groupe nord cameroun)
- 1) ナイジェリア東部：テラ (Tera), バブル (Babur), ロングダ (Longuda), ワジャ (Waja), タンガレ (Tangale), チャム (Tcham), ビタ (Bata), チャンバ (Tchamba), ダカ (Daka), ホナ (Hona), ヒギ (Higi), マルギ (Margi)
 - 2) カメルーン：ドアヨ (Doayo), フォコ (Voko), ドゥル (Dourou), ダマ (Dama), フェリ (Fali), ダバ (Daba), カプシキ (Kapsiki), マタカム (Matakam), マフ (Mofou), ヒナ (Hina), ギダール (Guidar)
 - 3) チャド：カンガ (Kanga), デオンゴル (Diongor), ビディオ (Bidio), ダンガレアト (Dangaléat)
5. コルドファン・グループ (Groupe Kordofan)
- 1) スーダン：ニイマング (Nyimang), コアリブ (Koalib), ヘイバン (Heïban), ロトロ (Lotoro), ミリ (Miri)

この中で、山地適応度がもっとも進んだ地域と民族は、

- 1) バンディアガラ断崖のドゴン族
- 2) アタコラ山脈ではソンバ族, タンベルマ族, カブレ族
- 3) ジョス高原のビロム族, バロン族, イリグウェ族, ルクバ族, アンガス族
- 4) マンダラ山地のマタカム族, カプシキ族, ダバ族, フェリ族
- 5) ヌバ山地のロトロ族, ヘイバン族, ミリ族
- 6) チャド, ゲラ山地 (Guera) のデオンゴル族, ロトロ族

である。

3. 第3の文化

フリーリッヒはこうした山地諸族に対して広範な民族誌資料を収集し、自らのフィールド・ワークに基づいた比較研究を行ったのである。すでに述べたように、第2次大戦後、ヨーロッパ諸国では文化圏説に結びつくパレオニグリティック文化に対する学問的関心は薄く、アフリカに9つの文化領域を設定した M. ハースコヴィッツも、いぜんとしてブッシュマンやホッテントットをとりあげてもパレオニグリティックの位置づけは行わずに終わった [HERSKOVITS 1967]。いわんや、アフリカ研究のおくれていた日本では、パレオニグリティックが論議される機会はほとんどなかったといえてよい。

1978年、筆者はフリーリッヒの所説の基礎になったフィールドのひとつ、トーゴ北部のアタコラ山地で調査を行う機会に恵まれた。そこで懸案のパレオニグリティックと目される第3の文化の検証に向った。

海岸にある首都のロメから国道1号線を北へ約400キロ、およそ北緯9度の地点で山塊 (Faïlle d'Aledjo) に遭遇する。ニジェール川西岸にはじまり、ベニンを北西方向によぎってガーナ南部につながるアタコラ山脈である。地形は厳しいが、一帯には数世紀にわたって北方から移動してきた諸族の堆積層がみられる。時には東方からモノ (Mono) 川を横切ってやってきた人びとの定着した可能性もある。また北西方向から逃げ場を求めて移動してきた集団も認められる。

それ故、一口にアタコラ山地民といっても起源は多様である。同じように山腹や丘陵地に居住していても、かならずしも言語や生活様式が一致しているわけではない。ただ南部のギニア森林文化と北部のスーダン・サバンナ文化のいずれにも属さない境界的な文化形態をもっているのが、ここを訪問しただれの目にも看取される。ベニン分離帯には強力なダホメ王国、北部のブルキナ・ファソ (旧オート・ヴォルタ) には騎馬軍ナコンセを率いるモロ・ナバ王のモシ王国、アタコラ山脈の東端部のベニン (旧ダホメ) にはバリバ王国、西部のガーナにはダゴンバ王国、アシャンテ王国があり、これらの諸王国の攻撃、掠奪、奴隷狩りからのがれるためには、人びとは自然の要害であるアタコラ山地に隠れ住み、可能な限り、外部の王制社会との接触をさけて、自給自足的に生きる必要があった。防禦的な住居、山地に適應した農業を発達させたのも、生活の安全を確保するために必要な手段であり、かれらの文化の基盤であった。それだけに、アタコラ山地民の文化は閉鎖性が強く、停滞的であった。

植民地時代、内陸へ向う伝統的な交易路からはずれて、アタコラ山地へ入ったヨーロッパ人は、そこに海岸の森林部でも内陸のサバンナ地帯でもみかけなかった別系統

の文化を発見した。それは、もっとも顕著な文化標識としてキー・ワードで表現すれば、1) 裸体生活、2) 分節組織、3) 集約的農耕の3項目になる。半世紀以上の時間的経過の後、民族学のフィールドとしてアタコラ山地を選んだ筆者もまた、もはや、裸体生活が顕著な文化標識ではなかったものの、基本的な文化特性はやはりこれら3つのキー・ワードに関連していることを確認したのである。いいかえると、パレオニグリティックと呼ばれる文化特性は、度合いを別にすれば、現在でも経験できる民族学的事実である。アタコラ山地には、フレーリッヒが提唱する西アフリカの第3の文化タイプが確かに存在していたのである。

筆者はその後、フータ・ジャロン山地、バンディアガラ断崖、そしてマン

ダラ山地にも足を運び、フレーリッヒの論拠を確認する手続きをとった。アタコラ山地と同様に、これらの北緯8度から12度のあいだに位置している西アフリカの起伏の大きな山岳地帯には確かに共通の文化標識が観察される。パレオニグリティックが同一起源の集団であるのかどうかを別にしても、はたからみて文化的に共通性が高いことは注目すべきである。

フレーリッヒは民族誌の比較研究を行うために東西に長いスーダン・ベルトに島状につらなる山岳地帯に住む諸民族を

- 1) ヴォルタ集団、2) ナイジェリア中部集団、3) カメルーン及びナイジェリア東部集団、4) コルドファン東部集団

の4つの主要な山地民族集団群に系統分類した。むろん、これらの4民族集団群のあいだには現在、相互に接触や交流はみられない。それにもかかわらず、文化的にはあたかも同じ集団であるかのように高い類似性が表出している。問題は、そうした4集団の基本的な文化の類似性がパレオニグリティックに起源をもっているのかどうかにか

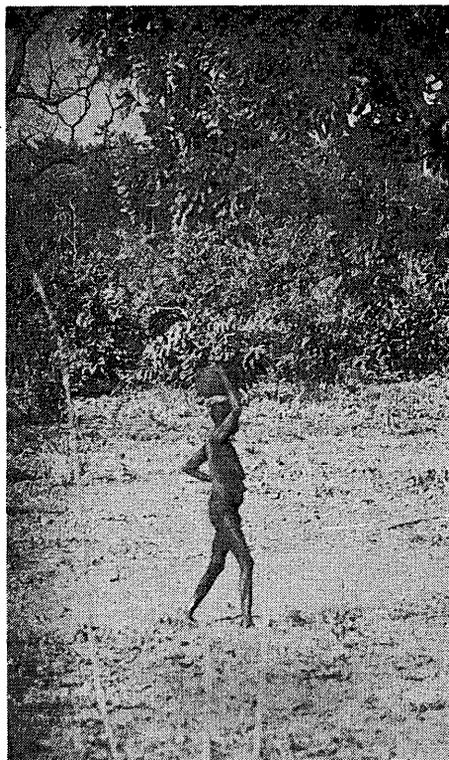


写真1 全裸で水を運搬する女性
(タンベルマ族)

ある。

3. パレオニグリティックの文化特性

1. 集約的農耕

フレーリッヒはまず、4集団に発達している集約的な農耕に注目する。4集団は現在、いずれも標高差のある起伏に富んだ山岳地に生活している。ここで、食料を確保するためには、農業を集約化する必要がある。岩山が多く、可耕地が限定されているので、テラスをつくり、土地を最大限に効率的に利用しなければならない。つまり、集約的農耕は、山岳地帯に封入された諸族の必然的な適応形態であり、パレオニグリティックの文化とは直接関係なく、環境要因に基づき発達した農耕技術とみることも可能である。

しかし、フレーリッヒは古代アフリカにおいてすでに避難場所が存在しており[FROELICH 1964: 387]、けわしい丘陵の斜面に土壌を保持し、階段式農耕を行う技術が発達していたとみている。

たとえば、中央アフリカのブアル地方 (Bouar region) に残っている巨石文化は、高度な農耕生産を背景に成立したと考えられ、また、東部アフリカにみられる階段式農耕の跡も、古代アフリカ人が斜面耕作を可能にする巧みな農耕技術をもっていた証拠とみられている。

スーダン西部のダルフル地方に残るジェベル・ウリ (Jebel Uri) やジェベル・マッラ (Jebel Marra) の階段状遺構もまた、メロエ王朝滅亡後、王家一族が避難した廃墟であり、幾世代にもわたって農耕民が生活していた痕跡として認められている。そして、ジェベル・ウリから南東へ10キロ、エイン・ファラ (Ain Farah) の遺跡はヌビアのキリスト教徒が隠れ住んだところという見方が有力で、時代は10世紀頃と推定される。

タンザニア北部、ソゴロンゴロ噴火口の東方にあるエンガルカ (Engarka) の遺跡も、マサイ族が遊動する辺鄙な場所にあり、ここも避難民の住居跡と考えられている。この遺跡の成立年代は比較的新しく、一部の学者の間では、約300年から500年前の間と推定されている [SASSOON 1967]。山麓一帯に広がる石造構築物は、現在、遺跡の近くに住む諸部族とはまったく関係がないが、アフリカ人の手によってつくられたことはまちがいない、といわれている。

ケニア西部、リフト・ヴァレーの西側の斜面に発達した灌漑農耕は、さらに年代が

新しく、強力な牧畜民によって牛を奪われたポコット族が、リフト・ヴァレーに避難場所を見つけ、農業によって生きのびるために灌漑を発達させたという。

このように、住居遺跡、階段耕作、灌漑設備等の痕跡は、多くが、辺鄙な人目につかない地形や、接近しがたい場所にあつて、歴史的には、古代から現代にわたって類例をみることができる。パレオニグリティックの場合は、いつ頃から山岳地帯に潜伏するようになったのか、正確な歴史年代は明らかにできないが、おそらく西スーダンに古代諸王国が成立した頃からと推定される。集約的な農耕形態は、それ自体ではかならずしもパレオニグリティック特有な文化特性とはいえないが、西アフリカの山岳地帯では、パレオニグリティックに限って発達した。その意味では、古代的な文化特性の発現形態といえるかもしれない。

2. 分 節 組 織

さて、西スーダン諸王国の支配領域からのがれて山岳地帯に潜入したパレオニグリティック避難民は、自らの存在を知られないために、つとめて平地諸族との接触や交流を断って生活していた。

集落も、丘陵地に住居や屋敷等が点在する散村形態で、全体が一望に把握されることはない。平地村のように、集落を囲繞する防壁や村界をつくることは困難であり、ドゴン族のような集村形態は、パレオニグリティックでは例外的である。ただし、こういった山地環境にもかかわらず、人口密度は意外に高く、急峻な頂上附近にも集落が集中している。防備の必要から人口密度が高くなったのであり、外敵の侵入には城塞のような地の利を生かして戦闘員の数で対抗したのである。

すでに述べたように、パレオニグリティックには、政治首長に組織された戦闘体制はなく、家族のなかから戦闘員が供給された。社会組織の基礎は拡大家族であり、その地域的結合としてクランがある。クランは、パレオニグリティックの場合、同じ単系血縁に属するいくつかの拡大家族が同じ土地に集まり、より大きな共同生活の単位として集落の一部を構成している。かれらの世代深度は浅く、タンベルマ族では3～4世代までしか祖先をたどることができない。クラン・リニアリティをもつコンコンバ族も6世代以上はさかのぼれないとD. タイトは報告している [TAIT 1961: 222]。血縁の連帯よりはむしろ、土地の共通性、農業労働の協力、集団的防衛等を基礎にした地域的に連帯のほうが第一義的に重要なのである。つまり、最大の政治単位は部族ではなく、地域共同体であり、その地縁的境界はかなりの程度まで生態学的な地形できまっている。重要な政治的意志や祭宴の執行は地域共同体ごとの家族長の合議によ

って決定され、最大の危機に直面したときは、地域共同体は連盟も実現する。

しかし、中央的な政治権威は存在しない。そして、そうした地域共同体を構成しているのが、家族を基礎にした分節組織であり、儀礼組織なのである。パレオニグリティックの中にはイスラム教の影響を受けて、政治首長を創設し、平地諸族に対抗した山地民もあるが、これは、伝統的には存在の認められない政治組織である。かれらの政治過程は、通常、呪的権威による儀礼支配をとおして実現されるのである。

3. 裸 体 性

ところで、パレオニグリティックの防衛意識がもっとも典型的に現われているのが住居形式である。中でも、アタコラ山地のシャトゥ (Château) と呼ばれるソンバ族、タンベルマ族の城塞住居 [和田 1979a], ガーナ北部のカセナ族、ロビ族等の堡壘のような砦形住居 [川田 1979a, 1979b, 1979c], マンダラ山地の尖った円錐形の屋根をもつ円形住居をいくつもつなぎ合わせたラビーリンスのようなマタカム、カプシキ、ヒデ等の諸族の要塞型の屋敷 [江口 1978; ガルディ 1960], そしてナイジェリア高地のユーフォルビアの垣根で囲まれたピロム族、イリグエ族の奥行き深い屋敷 [FROELICH 1968], 等については、すでに多くの民族誌があり、そこでは、住居や屋敷の構造や平面図等に合わせていかに防衛を中心に建築が行われてきたかが明らかにされている。そこでここではこれらの諸族の住居形態について繰り返し述べるのはさけて、パレオニグリティックにきわめて特徴的な文化の対照性について言及したい。

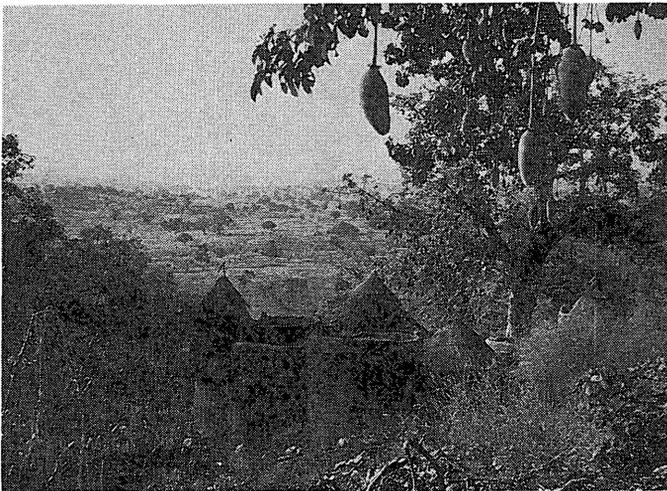


写真2 タンベルマ族の城塞住居

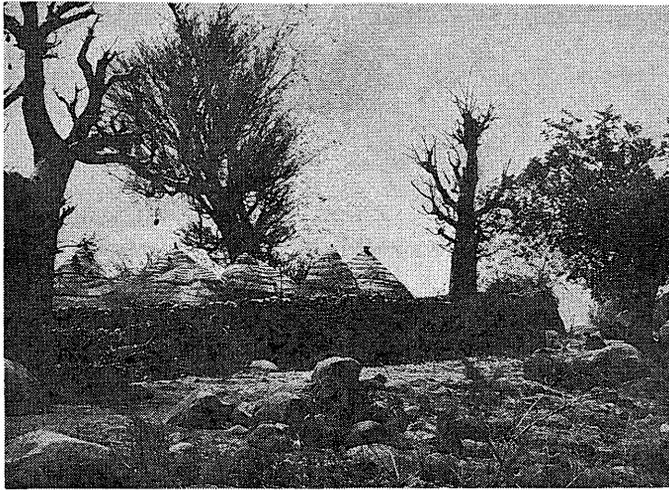


写真3 カメルーン北部・マンダラ山地マキシ族（ヒデ族の分派）の防衛的な岩形住居（1983 江口一久氏撮影）

つまり、かれらは家屋に関しては平地農民が及ばぬほど卓越した建築技術を發揮するにもかかわらず、身体を保護する衣類に関しては、ほとんど関心を示すことがなく、衣と住との間にきわめて顕著な対照性がみられるのである。

裸体性はアルカイックな文化表現のひとつである。巧妙に構築された建築物は、おそらくイスラム侵入以後に防衛のために発達した比較的新しい山地民の文化であるが、裸体性はパレオニグリティックの過去を明確にする主要な文化表象のひとつのように思われる。

中部サハラには、そうした古代アフリカを推察できる有力な手掛りが残されている。それは、タッシリ山地 (Tassili) に残されている岩壁画である。フランス人アンリー・ロートの先駆的な仕事によると、サハラがまだ緑におおわれていた時代（西紀前4000年）、タッシリから地中海方面に向かって肌の黒い人種が占拠していたとみられ、ロート等によってフレスコに見立てられた岩面画は²⁾、現在のニグロイドの遠い祖先が残したものと考えられている [LHOTE 1958]。傷痕、ふんどし、装身具、仮面等³⁾のデザ

2) ロートはサハラの壁画をフレスコ (fresques) と呼んでいるが [LHOTE 1958]、美術史でフレスコ (fresco) といえばほとんどの場合、漆喰壁に描かれた絵画を指している。故にサハラの岩壁画をフレスコと呼ぶのは適切な表現ではない。

3) ロートはアウアンレトの山塊 (Aouanrhet) で身体に奇妙な縞模様をつけ、仮面をかぶった男の絵を発見した。その仮面は現在、象牙海岸のセヌフォ族がイニシエーションの際に用いる形式と類似しており、また、頭の羽根飾りや腕やふくらはぎに巻いた飾り、そして点描のデッサンは、今でも西アフリカの奥地によって実行されている傷痕に通ずるものがあるという [LHOTE 1958: 87-90]。

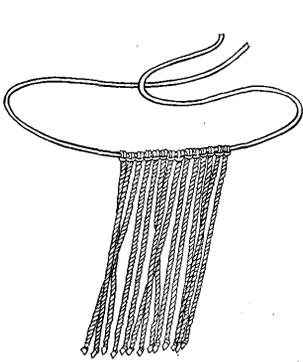


図3 未婚女性の植物性の腰飾り (キルデイ族)

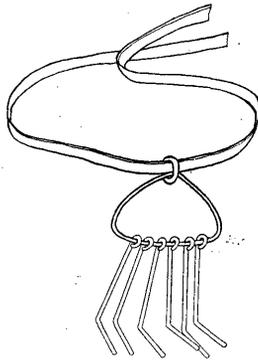


図4 既婚女性の鉄製の腰飾り (ヒデ族)

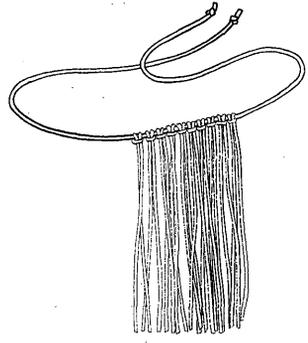


図5 未婚女性の皮製腰飾り (ヒデ族)

インは、現在のパレオニグリティックの文化に相通ずる共通性があり、裸体性に結びつくものである。

すでに筆者は、全裸あるいは素朴なふんどしが、アタコラ山地民の文化特性であり、伝統的なスタイルであることを自らの観察を加えて紹介した。また、山中で、傷痕を施された少女たちに出会ったときの最初の衝撃についても報告した [和田 1981]。マンダラ山地、コンジュラ峰でヒデ族 (Hide) を調査した江口一久氏によると、男性はペニスを覆うことなく、尻あてのついた腰紐を1本巻いて生活しており、未婚であれば、パツァパツァ (*pacapaca*) と呼ばれるすだれ状の皮の腰飾りをつけ、結婚後はカザンゲル (*ngazngel*) という鉄製の腰飾りをつけるだけであったという [江口 1978]。ただし、カザンゲルは労働には適さないので、ふだんの畑仕事にはこの腰飾りは家に置いて、かわりにカイセドラ (*Khaya Senegalansis*) 等の葉を腰に巻いて出かけるという [江口 1978: 54-55, 115]。

ナイジェリアのジョス高原でも、1950年代の民族誌写真によると、ふだんは腰に木葉の束を巻くだけの簡単なふんどしが身につけるすべてであった。また、コルドファンのヌバ山地については、写真家 L. リーフェンシュタールによって完全な裸体生活がかメラにおさめられている [RIEFENSTAHL 1976]。

このように、パレオニグリティックは樹皮布さえつくり、巧妙なつくりの屋敷に住みながら、もっぱら裸体で生活していた。マタカム族も現在は、フルベ族から教えられて機織の技術をもっている。だが、身体にショールのように布片をかけるようになったのは、独立後、しばらくしてからで、局部の露出に羞恥心をもつようになったのは最近のことだといわれている。アタコラ山地においても、ほぼ同様の歴史経過をたどって衣類が普及し、筆者の調査時点では全裸は古老にしかみられなくなっていた。

フレイリッヒの指摘したパレオニグリティックの全裸性も表面的にうすれつつあるが、文化特性として消滅したわけではない。

4. 鍛 冶 師

ところが、鍛冶師は今でも一糸まとわぬ全裸で作業を行っている。マンダラ山地では、R. ガルディによって報告されたマタカム族の鍛冶師の全裸性が有名であるが [ガルディ 1960]、部族がちがっても、この地方に住む鍛冶師たちならすべて、精錬作業を成功させるために、全裸で作業を行い、ふだんでも一切の衣類をまとうことをしない。全裸性は鍛冶師の証明であり、農耕民との間に一線を画するクラン表象である。「ドラ」(*dra*) と呼ばれるヒデ族の鍛冶集団を調査した江口一久氏も、「ほんとうのはだかとは、かじ屋の男たちのことをいうのです (傍点原著者)」と述べている [江口 1978: 54]。だが、こうした鍛冶屋の裸体性それ自体は、鉄とパレオニグリティックの結びつきについて何ひとつ語ってはいない。なぜ、パレオニグリティックが鉄をつくるようになったのかも一切不明である。

原始的な鉄の生産技術は、土製高炉に鉱石と炭を混ぜ合わせて投入し、火をつけるだけなので、原理的にはそれほどむずかしい仕事ではなくて、ニグロイドによって発見された可能性が強い。アフリカ大陸では、ラテライトの露出鉱が多数あり、鉄生産の条件はそろっていた。R. モーニによると、西紀前300年頃、すでに西スーダン・サバンナ帯では鉄生産が開始されていたという [MAUNY 1947: 34]。ただ、現時点では古代都市メロエのボタ山以前の古い遺跡は発見されていないので、サハラ以南のアフリカにおける鉄生産の技術は、紀元1世紀頃、古代の製鉄センター、メロエから長槍をもった騎馬民族を介して、チャド方面に伝播し、そこからさらに、アフリカ全域に広がったというのが通説になっている。しかし、モーニの研究を基礎に推定すると、鉄製法は北アフリカのカルタゴやバーバリ、コーストからサハラを越えて、紀元前3世紀頃、すでにニジェール河畔の諸都市に伝播していたという見方も成り立つ。いずれにしてもパレオニグリティックが鉄生産に関係した歴史は古く、少なくとも西紀以前であったことはまちがいない。

同様に、現在、ヴォルタ集団、ナイジェリア集団、北カメルーン集団にみられる鍛冶師の裸体性も起源的には古く、おそらくパレオニグリティックに直接結びつく文化特性のひとつのように思われる。シュレ・カナルによれば、アフリカにおける綿織物は、11世紀、エル・ベクリによってはじめて西アフリカで確認されたのであり、イスラム以前には布地の着用がなく、裸体がふつうのことであった [カナル 1964: 142]。

つまり鉄生産の起源と裸体性はアルカイックな面で一致している。ただし、パレオニグリティック4集団の中で、コルドファン集団には鉄工職人は存在しない。今日、この地方にみられる鍛冶師は、アラブ人の需要に応じて成立したもので、伝統的なスーダン人の生活に結びついているわけではない。おそらく、コルドファン地方は古代都市メロエに近い位置にあり、部族内に鍛冶集団をかかえることなく、何らかの方法で鉄を入手していたと思われる。

鉄造りは秘伝である。何の変哲もない石や川砂を鉄に変える技術は神秘性をおびていて、一種の魔術である。故に、鍛冶師はしばしば尊敬と威怖の入りまじった目でみられていた。

すでに述べたように、北カメルーンでは、鍛冶師は特殊な職能クランを形成し、祭式を主宰し、予言者になる。内婚制で、その家族は他の家族とまじわらない。鍛冶師の妻も助産婦であり、土器作りもかれらにだけ許された専門職である。鉄工と土器作りは技術的に、関係が深く、アフリカの製鉄法は土器作りから発見されたという見方も有力である。鉄も土器も同じクラン内の専門的職業であるが、男女の分業によって生産されていることは、注目すべき事実である。

ヴォルタ集団も鍛冶師集団は男性で、土器製作者は女性である。しかし、かれらはカメルーン集団のように内婚的な職能集団を形成することはなく、また、むらの祭式の主宰者になるとは限らない。つまり、同じパレオニグリティックでも、4地域で鍛冶師の存在に関する社会的ないし文化的な位置づけが異なっていて、職能集団としての役割にもバリエーションがある。しかし、パレオニグリティックは、イスラム諸王国の支配機構から離れていたため、ウォロフ (Wolof)、セレル (Serer)、トゥクロール (Tukulor) 等の諸族にみられる鍛冶師の職能別カーストは存在せず、呪的権威は認められても集団構成としては平等だったのである。

5. その他の文化特性

その他のパレオニグリティックの文化特性は細かな項目になり、どの程度古代アフリカ的な要素をもつのかひとつひとつ論証するのはむずかしい。

武器としては弓矢が伝統的に重要で、ユーフォルビアを原料にした矢毒の製法が発達している。また、遠出のばあいは短剣の携帯が一般的で、通常、肩か首にかけて歩行する。ただし、コルドファン地方では、槍が重要で戦闘用に常備されている。

ついで、武器と同じように携帯されるものとして、皮製袋がある。大きな物は肩から、小さな物は首からさげる。現在は、たばこ、パイプ、塩、薬草、そして金銭等を

中に入れて携行するが、起源は古く、昔から裸体生活の必需品になっていた。

農具については西アフリカで、一般に「ダバ」(*daba*) と呼ばれている柄の短い手鋏がパレオニグリティックに起源をもつ、古代的形態のように思われる⁴⁾。より古い農具としては掘り棒が想定されるが、農耕民のあいだでは現存するものはなく、コルドファン地方で今も用いられている柄の先端に小さなシャベル状の刃のついた、一種の鋤に掘り棒に似たアルカイックな農具の形態が残されている。「ダバ」にもさまざまな形態があることを川田順造



写真4 パレオニグリティックの首にかけ
る短剣(タンベルマ族)



写真5 鉄鉱石の採取(セヌフォ族)

氏はスケッチをもって示しているが[川田 1979d]、ナイジェリア地方で使用されている農具については本館でも収集され、比較研究が可能である。けずめ付の鋏は「ダバ」の一種であるが、この地方に独特なものである。また、パレオニグリティックのばあい、穀物の製粉には家屋に備えつけられた石臼が用いられ、平地農耕民のあいだに並及している木製の臼と杵は、伝統的な農具のカテゴリーの中には存在しなかったものである。

楽器としてはヤギやウシの角に穴を

4) 「ダバ」(*daba*) は西アフリカで使用されている柄の短い鋏の総称である。語源は北部マンディ語にあるが、スーダン・サハールの諸族に一般に通用する言葉になっている。

あけた角笛，モロコシで作った口琴，鉄の輪のガラガラ等はイスラム以前から愛用されていたと思われるが，リュートのような弦楽器はイスラムから導入された新しいものと考えられる。

仮面は本来，裸族であるパレオニグリティックには認められないが，セヌフォ族のように，製鉄法に古代的な文化要素を残しながらも森林文化の影響を受けて，秘密結社が芸術的な仮面を製作している例外的なケースもある。

以上，パレオニグリティックの主要な文化特性を素描したが，これらの問題については，さらに多数の比較資料を収集し，詳細な検討を加える必要がある。筆者は1972年，北部トーゴにおいてパレオニグリティックの調査を行い，アタコラ山地民にあたって一帯の文化特性を明らかにしようとしてつとめた。そこには，すでに若干ふれたように，パレオニグリティックとしての基本的な文化特性がみられたが，また，アタコラ山地の独自の歴史性，地域性を反映した文化の展開をみとめられたのである。

4. 北部トーゴの文化特性

1. 平地民の技術誌

すでに述べたように，トーゴ国は通常，南部と北部に区分される。独立直後まで，ほとんど未開状態であったファザオ (Fazao) の無人地帯を境に，南部はギニア型，北部はスーダン型の人種の特徴を示し，言語学的には前者のクワ語系 (Kwa), 後者がヴォルタ系 (Volta) あるいはグル語系 (Guir) と総称される [和田 1979: 534-535]。

北部ヴォルタ系諸語は，現在の言語学の一致した分類名ではないが，トーゴでは通常，パラ・グルマ (Para-Gourma) とテム・カブレ (Tem-Kabre) に2分類され，前者には，モバ (Moba), グルマ (Gourma), バッサリ (Bassari), コンコンバ (Konkomba), ガンガン (Gangan), チャンバ (Tchamba), タンベルマ (Tamberma), ナチャバ (Natchaba), 後者には，カビエ (Kabyè), テム (Tem)=コトコリ (Cotocoli), ントリブ (Ntribou), ランバ (Lamba), ナウデム (Nawdem) が含まれている。

しかし，2つの言語集団のどちらに属するにせよ，北部トーゴ諸族は，歴史民族学的にはすべてパレオニグリティックの文化領域の内にあり，多かれ少なかれ古代アフリカ的な文化要素を残存させてきたとみられている。だが，パレオニグリティックとしてフレリッヒが注目しているのはガブレ，ナウデムバ (ロッソ)，タンベルマ (ソンバ)，ランバの4部族である。その理由は，おそらく北部諸族の中で現在，山地民として位置づけられるのは，これらの4部族であり，他の部族では大半が平地に適応

して生活を営んでいるからであろう。

そこで、北部諸族のパレオニグリティックの文化特性を考察するにあい、まず山地型と平地型に分けて比較するのが有効である。ただし、平地型といっても、アタコラ山脈の影響を受けて、中部州やカラ州では、台地状の地形が主要な生活環境であり、標高差がなく、純粋な平地とみなされるのは、カンテ (Kant) 以北に広がるサバンナ州のオティ (Oti), カラ (Kara), ケラン (Keran), 3つの川の流域平原である。

さて、北部のはじまりはソコデ (Sokode) である。中部州の州都であり、主要な住民はコトコリ族である。同じテム・カビエ系言語を話すカブレ族、ナウデンバ族と比較すると、平地型で、もはやパレオニグリティックの文化特性は感じとれない。しかし、フレリッヒにしたがうと、16世紀末まで、そこはパレオニグリティックの土地だったのであり、具体的な住民としてはラマ族 (Lama) の名があげられている [FROELICH *et al.* 1963: 6]。ラマ族の呼称は現在、地名に残っているが、正体は不明である。おそらく現在のカブレ族やランバ族に近い種族であったと推察される。17世紀に入ると、パレオ・スーダン文化をもったグルマ、バッサリ、ダゴンバ、バリバ等の諸族があいついで南下してきて、ソコデに到達し、ラマ族の居住地を奪った。ラマ族のゆくえはわからないが、四散して山中に潜入したと思われる。さらに18世紀から19世紀にかけて、今度は、ネオ・スーダン文化をもった人びとが⁵⁾、西スーダンやニジュール方面から移住してきて、自分たちのすぐれた文化を紹介した。騎馬、槍、刃剣、マスケット銃、イスラム装束、足踏み織機、そして割礼の習慣等は、そのときもたらされたのである。だが、かれらは、言語に関しては土地の言葉、テム語に同化した。現在、テム語を話す人びとのことをコトコリ族と呼んでいるが、語源は明らかではない。ただ、コトコリ族という呼称は、ソコデ地方の政治的な統合過程を通して普及したと思われる。

すなわち、ソコデがチャウジョ (Tchaoudjo) と呼ばれていた頃、11の首長領を支配する最高首長ウロ・エソ (Uro Eso) が出現し、一帯には封建的な政治体制が形成されていった。ソコデは、ガーナ北部からの移住者、ダゴンバ族が創った都市だといわれているが、ナイジェリア北部のハウサ族等も交易のために集合し、イスラム文化の町に成長していった。そして1850年から1870年のあいだに、イスラム教徒たちは、

5) ネオ・スーダン文化に分類される文化項目は、楽器類では擦り太鼓、ダブル・ゴング、つみ、締め金付ハーブ等、容器類では装飾されたスプーン、取手つき壺等。装身具では金属製腕輪、金属製くるぶし飾り等、武器、戦闘具としては、腕鎧、戦闘用斧、短剣、鋸歯付脂輪、弓置き等、農具では刃孔さし込み式の鍬、穂刈鎌、包丁等である [BAUMANN 1957: 72-75] 一王国、一部族にこれらの文化項目が完全にそろっているわけではないが、トーゴ北部諸族との関係でいえば、モン族、ダゴンバ族等がネオ・スーダン文化の担い手である。

首長領を再編成し、チャウジョの最高首長チャ・ジョボ (Tya Djobo) I世をイスラム教徒に改宗した。したがって、コトコリ族は、起源は多様であっても、スーダン文化の継承者であり、言語をのぞくと、パレオニグリティックの文化要素はほとんど認められず、現在、その93パーセントがイスラム教徒である [DELVAL 1980: 35]。

ところが、ソコデの北西約57キロの地点に位置しているバッサリ山を中心に分布しているバッサリ族は、コトコリ族と同じように起源が異なるさまざまな集団から構成されているが、古代アフリカ的な文化要素を維持している不思議な部族である。かれらは、自らを「ベ・ティアンベ」(Be-Tyambe)と呼んでおり、それはバッサリ語で鉄工職人という意味である。バッサリ族のもっとも重要な生業が、鉄生産と鍛冶職であったため、この自称を矜持をもって名のることになった。だが、しだいにベ・ティアンベは部分的になり、バッサリ族の方が包括的な呼称として一般的に使用されるようになった。

バッサリ語はコンコンバ、モバ、グルマ等の諸族の言葉と近縁なパラ・グルマ語系であるが、方言が多く、いくつかのクランは、「ベ・タプンベ」(Be-Tapumbe)、すなわち、境界人と呼ばれている。とくに、山岳部には、ヴォルタ諸王国の支配領域から脱走した人びとが移り住み、バッサリ語を話せる人びとは少なかったようである。

歴史伝承によると、ベ・ティアンベがバッサリ地方へやってきたとき、先住民のパレオニグリティックのラマ族と遭遇し、交婚しあったという。まだ充分な口頭伝承の収集が行われていないので、絶対年代の推定は不可能であるが、ベ・ティアンベと鉄生産の関係はこの頃はじまったのではないかと推察される。バンジャリ (Bandjeri) の背後の山中には、鉄鉱石を採取した多数の跡地がある。また古代的な土製高炉の遺跡がバンジャリその他、ビチャベ (Bitchabe)、バッサル (Bassar)、ナバブン (Nababun)、カブ (Kabu) 等にあり、捨てられた鉱滓の山はバッサリ地方の各地から発見されている。最近、こうしたバッサリ地方の製鉄の遺跡調査が P. バ

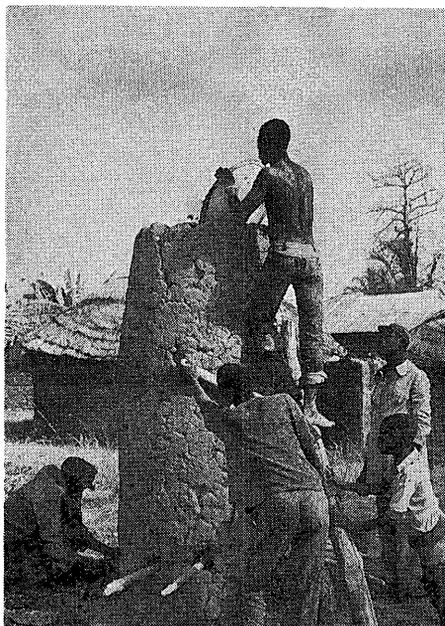


写真6 土製高炉 (バッサリ族)

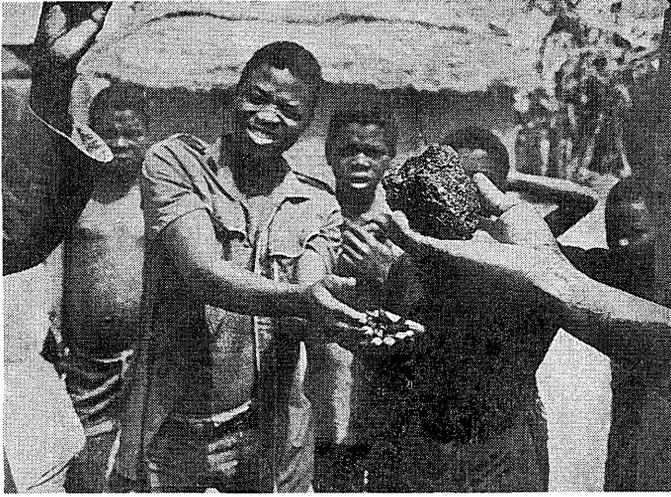


写真7 製造された鍊鉄（バッサリ族）

ロスによって行われ、成果の一部が発表された。その報告によると、もっとも古い鉱滓のマウンドから、採取した木炭の燃えさしをラジオ・カーボン法によって測定すると、この地方の鉄生産は14世紀までに開始されていたと判定された [BARROS 1986: 158]。いったい、どこから製鉄技術がもたらされたのであろうか。

年代の古さから判断して、西スーダンから伝播したことは確実で、たぶん、パレオニグリティックのラマ族が生産に従事していたと思われる。その後、鉄生産がもっとも盛んになるのは、16世紀から19世紀のあいだで、それは、15世紀から16世紀にかけて西隣りのガーナ北部にダゴンバ、マンプルシ、ゴンジャ等の諸王国が成立し、緊急に武器の需要が高まったからであろう。捨てられてある鉱滓の山の量の多くは、この時代のものであり、当時、バッサリ地方は、古代都市メロエと同じように工業センターであったのである。生産能力を高めるため、精錬工と鍛冶師は、クラン別の分業体制をとっていた。相互に職種をおかすことなく、精錬工たちはできあがった鉄をカウンター・パートの鍛冶師たちに売り渡すのが決まりであった。鍛冶師たちは、その鍊鉄をつかって鋤、鋤、斧等の農具を生産し、農耕民の需要に応ずると共に、槍先、山刃、鏃等の戦いの道具をつくっていたのである [和田 1987c]。

鉄を目的に各地から商人たちが集まってきて、バッサリ領内は、交易で大いににぎわった。鉄と並んで重要な交易品のひとつであるコーラを求めて遠くナイジェリアのハウサ諸都市からガーナの森林王国アシャンティへ向うキャラバンも、ここを中継基地にしていた。17世紀頃から、鉄生産地を首邑にいくつかのバッサリ諸王国が形成さ

れ、領内を通過する商人たちから通行税をとり、富を蓄積した。

こうしたバッサリ首長国の繁栄に対してダボンバ王国がしきりに攻撃を加え、富の略奪をくだてたが、それをはね返す強力な防衛体制がとられていて、政治的な実力も相当であった。鉄工と鍛冶の技術に関しては、パレオニグリティックの古代的な文化特性を維持しながら、政治的指導者を持ち、首長国としてネオ・スーダン文化の特徴を発展させたが、アニミスティックな要素を残し、コトコリ族のように全面的にイスラム化しなかったところにバッサリ族の特徴がある。

さて、北部からやってきたイスラム教徒を担い手とするネオ・スーダン文化は、ソコデの他にバフィロ (Bafilo) にも定着した。ソコデから、トーゴ中部を南北に両断する急峻なアレジョウ (Aledjo) の断層崖を越えて北へ51キロの地点にバフィロがある。昔はラマ族が住んでいた高地であり、19世紀初頭、北部からファダ・ングルマ (Fada N'gourma) の王家と首長の子孫が来住してイスラム首長国を形成した。それに後続して機織工、製靴職人、鍛冶師、グリオ (griot) 等の職能集団が到着し、バフィロはトーゴ北部の手工業の中心になった。現在も、南部エヴェ族のケンテ・クロスに対抗する織物の製作地として有名である。

以上、北部トーゴのイスラム文化圏は、ソコデーバッサリーバフィロを結ぶ線で囲まれる三角地帯であり、イスラム教徒が通過しただけの北部サバンナでは、ネオ・スーダン文化の影響はほとんどみられず、コンコンバ、モバ、ディ、ナッチャンバ等の平地諸族はすべて集権的な政治組織をもたずクランによる分節社会を形成している。

たえず周囲の諸王国から征服されていたコンコンバ族は、クラン集合性が弱く、相互間に深い亀裂を生じ、内部で戦闘することさえあった。そしてモバ族は、グルマやマンプリシの王制社会の支配を受けて、クランのいくつかは、家臣になっていた。人口が少なく勢力の弱いディ族は、もっとも土着的な性格を残しているが、今日はモバ族とかなり混血している。16世紀以来、トーゴ北部の平原諸族は、断続的な近隣からの侵入者に悩まされていたのである。

しかし、ここで興味深いことは、コンコンバ族が、侵入者のダゴンバ族と接触するよりは、周囲の無頭的な分節社会とより緊密な関係を結んでいたことである。それ故、文化的にもパレオニグリティックとの類似性の方が高い。クラン成員は共通の傷痕を施していた。前にも述べたが、傷痕は古代アフリカ的な文化要素である。コンコンバ族は、女子には顔面、胸部、腹部、背中に複雑な文様の傷痕施術を行っていた。モバ族もまた、イニシエーションの際に男女とも傷痕をつける。

裸体性は、コンコンバ族の方が強く、男はふんどしをつけ、女は木綿の短い腰巻き

をつけるだけの裸体に近い身なりであった。モバ族にはベニス・サックのついたふんどしや三角形の皮製前だれがあり、イニシエーションの際には今でも用いられている。パレオニグリティックの文化に結びつく起源の古い着用物である。

装身具としては、鉄製腕輪や木の実の首飾り等にパレオニグリティックと同形態のものがみられる。コンコンバ族の中で、一般にガンガン族 (Gangan) として知られているブ・コンボンク (Bu-Kombong) クランの女性は水晶の口栓をはめる習慣があり、装身具の中にもっとも古い文化要素が維持されている。

住居は、同じ敷地内に数棟の円錐屋根・円筒形の小屋を連ねたグルマ系の建て方で、屋敷囲いはあるが、かならずしも防衛的にはなっていない。

コンコンバ族にもモバ族にも、鍛冶師クランは存在する。が、しかし、カーストは形成しない。昔はバッサリ族との交易を通してバンジャリ等から鉄を入手し、鉄製品を作っていた。ふいごはヴォルタ諸族のあいだに普及している皮ふいごで一対型・複式羽口である。

以上、平地サバナ諸族は、おそらく王国形成よりも古い時代のグルマ文化の継承者であり、王権支配に反抗して、むしろ平等な無頭社会との接触を深めたので、文化的にはパレオニグリティックと高い類似性を示しているのである。

2. 山地民の技術誌

トーゴ北部で典型的なパレオニグリティック山地民は、カブレ、ナウデンバ (ロッソ)、ランバ、タンベルマの諸族である。いずれもアタコラ山地の高原や丘陵地に居住している。この中でもっとも人口密度が高く、集約的な農耕を行っているのがカブレ族である。

L. フロベニウスは、カブレ族のことを「Steinbauer」と呼んだ。土地と屋敷に岩石の使用が目立つからである [FROBENIUS 1913]。屋敷の囲いには除石の山がある。屋敷の入口の両側には、そうした岩石を並べて通路を区画している。堆肥場の囲いも大小の岩石が用いられている。そしてもっとも注目されるのが、屋敷の背後にそばだつ山地に構築された岩石のテラスである。斜面を階段状に切り、適当な大きさの除石を積み重ねて、土手を築き、山頂まで農地を拡大している。

テラス農耕は山地民の人口密度が促進要因になる。山地民は人口増加にともなう食糧確保のためにテラス農耕を発達させた。フリーリッヒが調査した1940年代後半、カブレ族の中心居住区であるラマ・カラ地区 (Lama-Kara) で1平方キロあたりの人口密度は約250人であった。カブレ族と地理的にもっとも近接しているナウデンバ族も、

斜面を格子状に区切り、土手を造成し、土壌の流出を防いで、斜面農耕を行っている。しかし、カブレ族のテラス農耕ほど巧妙ではない。

人口密度が1平方キロ約10から25人の地区と、10人以下の地区から構成されているランバ族ではなだらかな丘陵地に農地を拡大した場所はあってもテラス農耕はほとんどみられない。同程度の人口密度のタンベルマ族もまた、山地の一部に階段状耕作を行っているが、土地利用の技術としては脆弱なものである。したがって北部トーゴのテラス農耕に象徴されるパレオニグリティックの集約的農耕は山地民の人口圧力が大きく作用していることはまちがいない、古代的要素はまったく関係ないように思われる。それでは、なぜカブレ族に急速な人口増加がおこったのであろうか。

すでに述べたように、カブレ族が支配的に居住しているラマ・カラを中心に、北はマンゴ (Mango) とケラン川 (Kéran), 南はソトボア (Sotouboua), 東はベニンのジュグー (Diougou), 西はファザオ (Fazao) 山脈からブリッタ (Blitta) に囲まれた地域が、昔、古代ラマ族の遊動する勢力圏であった(図6参照) [FROELICH 1949: 78]。ラマ族がしだいに勢力圏を縮小され、山岳地帯に封入されたのは、主として侵入してきた移住民の外圧による。

そうした移住民を列挙すると、

- 1) ベニンのニッキ (Nikki) から来住したバリバ族
- 2) 北から南下してきて、現在のコトコリ族の中に宗主クラン・モラ (Mola) を創設したグルマ族
- 3) 数的には多くはなかったが、ガーナのダゴンバ族、バッサリ族 (特にベ・ティアンベ), アシャンティ族, そしてニジェールのデンディ族 (Dendi)

等があげられる [FROELICH 1949a: 87]。

かれらがトーゴ中部に侵入してラマ族の居住地に割り込んできたのである。また、移住民以外の外圧として、ニジェール方面からやってきたジェルマ族 (Djerma) の騎馬隊の侵掠と、海岸部のフォン族 (Fon), エヴェ族 (Ewe), アシャンティ族の奴隷狩の影響をみのがすわけにいかない。とりわけ「ベニン分離帯」に成立したフォン族を中心とするダホメ王国の奴隷狩はラマ族の最大の恐威であった。ラマ族は平地から後退して、山地に潜入した。トーゴ山脈の斜面コリナ・ボ (Kolina-Bô) 山地, ダコ・スドゥ (Dako-Soudou) の高原, バッサリの連峰, ジャンデ (Djamdé) とシルカ (Sirka) の山々はラマ族が身をかくす絶好のかくれ家になった。侵入者の前からラマ族は姿を消していったのである。だが、これらの山岳地方が安住の地であったのは、ほんの一時期であった。定着した移住民の勢力が増大し、身近なラマ族を圧迫しはじめた。争

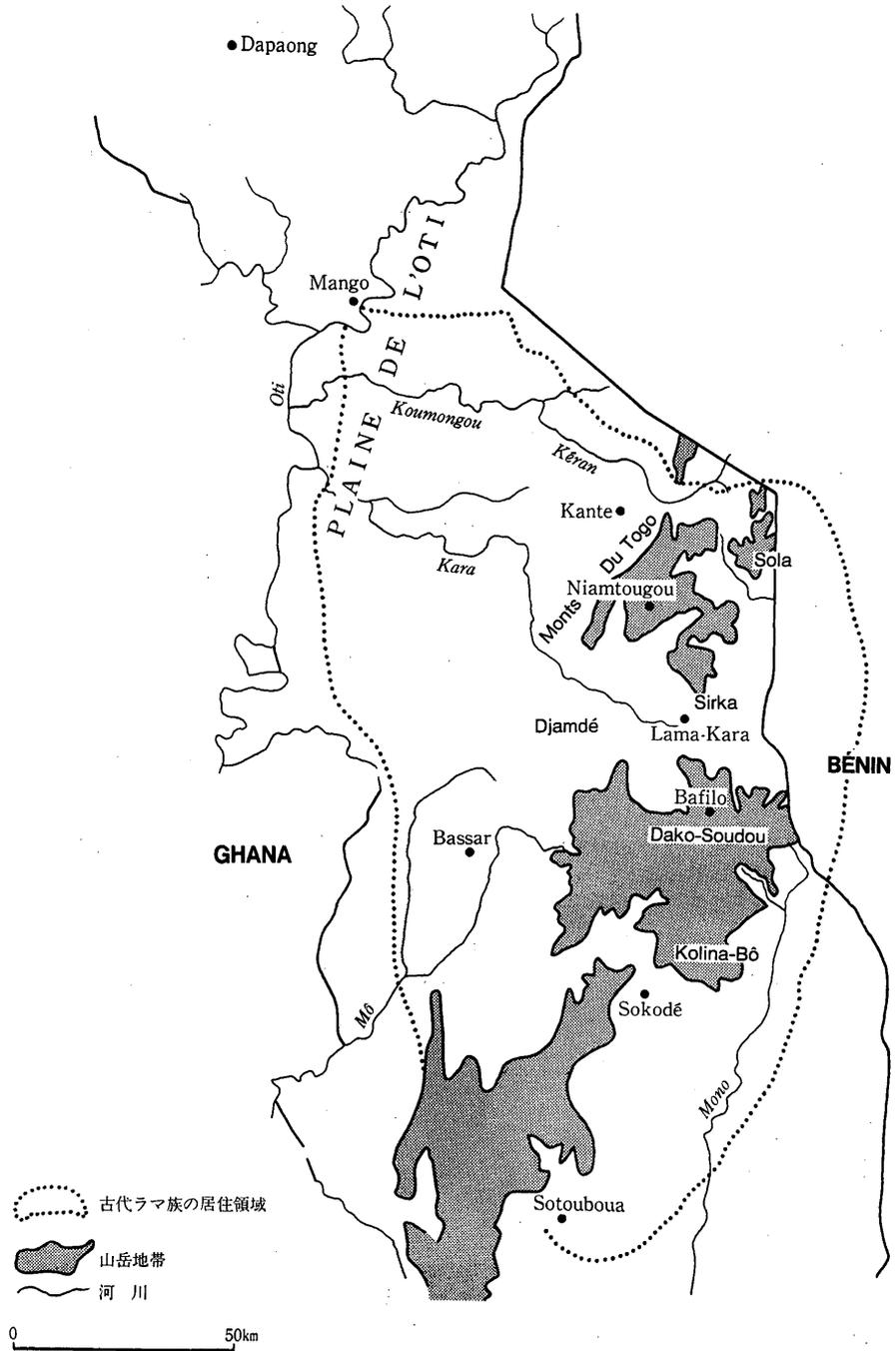


図6 北部トーゴ、ラマ族の居住領域と潜入した山岳地帯 [FROELICH 1949a] より

いを避けたラマ族は、漸次、より安全なカラ山中に移動し、もっとも奥まった要害堅固な山岳地に閉じこもった。また、平原部に近い独立峰に残留したラマ族は、コトコリ族、ベ・ティアンベ族に同化し、その中でいくつかのクランを構成することになった。こうしてラマ族の居住地は侵入者が定着して約200年の間に、狭小なカラ山中に限定されてしまった。カラ山中における人口密度の上昇は、この時点からはじまったのであり、防備の安全が人口を増加させたのである。当然、さまざまな形の避難民が流入したことは想像に難くない。反対に、内部からの外出がないので人口密度は高くなるいっぽうであった。これがカブレ族の人口密度がトーゴでもっとも高くなった理由である。

つぎに、カブレ族とラマ族の関係については、現在のカブレ族の主なる祖先はラマ族であったと思われる。カブレ、あるいはカビエとは、国や領土を意味し、自分たちのことをカブレの人々、すなわち「カビエ・ンバ」(Kabye mba) と称していた。「カビエ・ンバ」はすべて、同じ言葉を話し、文化的にも統一性があったが、政治的にひとつの部族として組織化されていたわけではない。フレーリッヒにしたがうと、カブレ族には3つの地方性があり、それぞれに方言があるという [FROELICH *et al.* 1963: 64]。

- 1) 北部山塊に居住し、ラマと呼ばれている人々
- 2) 南部山塊に居住し、カビエ・ンバと呼ばれている人々
- 3) ダホメのジュゲー地方のラテライトの高原に居住するログバ族 (Lögba) を加えたある一群の人々

この内、ラマ族の文化的な痕跡は、1)と2)の地方と集団によって濃厚に残されていると思われるが、現段階ではまだ、そこまで資料の整理が進んでいないので、文化細目の比較検討は、つぎの機会に譲りたい。また、現在ランバ族の呼ばれている人々も、その呼称から類推されるように、古代ラマ族の子孫であるが、同じ研究プロジェクトで、ランバ族を調査した武田淳氏の報告がまもなく発表されるので、その後で、パレオニグリティックとの関係を比較してみたい。

ここで注目しなければならないのは、カブレ族とランバ族の中間に位置しているナウデンバ族の存在である。ナウデンバ族はこれまで一応、パレオニグリティックに位置づけて言及してきたが、カブレ族とはまったく起源の異なる部族である。かれらはたぶん、17世紀頃、ブルキナ・ファソから移住してきたのであろう。フレーリッヒによると、ナウデンバ語はモン語に近い、という [FROELICH 1950: 102]。デファレ山地 (Défalé) で斜面耕作を行っていることはすでに述べたが、フロベニウスがロッソをさして、「Palmbauern」(ヤシ耕作民) と呼んだように、一帯では油ヤシの栽培

が盛んな農村風景が広がっている [FROBENIUS 1913]。これらの油ヤシは、ロツ族が他の場所から持ち込んで移植したにちがいない。現在では、ヤシ畑になっている最初の油ヤシをロツ族はいったいどこから持ち込んだのだろうか。言語と同じように、フランスの民族学者は、モシ族と結びつけて考えているが、証明するのがむずかしい問題である。

コルヌヴァンは、フレリッヒの記述にしたがっているロツ族を2つの地域集団に分けている [CORNEVIN 1969]。

1) 植民地行政官からロツ族と呼ばれたヤカ (Yaka), アグバンディ (Agbande) に住んでいる人々

2) 厳密な意味でのナウデンバ族でありシウ (Siou), ニャムトゥグウ (Niamtougou), テネガ (Tenega), クーカ (Kouka), バガ (Baga) に住んでいる人々
前者がピア (Pya) からやってきた古代的なカブレ族を、後者が北部のブルキナ・ファソから移住してきたナウデンバ族を前身とする集団である。神話によれば、ナウデンバ族の始祖は天空からクーカ (Kouka) の聖木の中に降りてきて、ニャムトゥグウを創建し、同様なことがシウでもおこって、ナウデンバ族を創造したという。この神話が古代ラマ族との関係を示しているように思われるが、このあたりの調査はまったく行われていない。しかし、数の少ないナウデンバ族は、カラ山塊から押し出されたカブレ族に同化し、そのうちでも裸体性はカブレ族といっしょにされる文化様式になった。

フロベニウスの調査報告によると、カブレ族もランバ族も、男は全員ふんどしもしめない完全な裸体であった。1949年のフレリッヒの報告でも、当時、男の約30パーセントが全裸であった [FROELICH 1949a: 83]。とくに屋敷や畑では裸体がふつうで、男根の露出も日常的であった。ただ、旅先では他部族民の思わくを気にして布地をまとい、パンツをはく傾向が強くなってきたという。ところで、こうした裸体性を伝統とする人々も、なぜか麦わら帽子のような草で編んだ尖った帽子を愛用し、皮製サンダルで足を保護していた。帽子に羽根飾りをつけることもあった。裸体に帽子の組み合わせは、筆者の調査したタンベルマ族にもみられ、パレオニグリティックと呼ばれるアタコラ山地民に共通する文化特性といえる。ちなみにマンダラ山地にも頭部をおおう意識が働き、男性は筒状の頭巾を頭にのせ、女性はヘルメットのような半球形のヒョウタンをかぶるのが、江口氏の調査当時、ヒデ族によくみられた着用習慣であった。

さて、裸体性はカブレ族でも傷痕文化を発達させて、顔面や体表にさまざまな文様

の傷痕をほどこし、植民地初期には、鼻孔に穴をあけ、木栓をはめる習慣もあった。ロソソ族の傷痕のパターンについてはすでに報告したことがあり [和田 1982]、また、タンベルマ族の傷痕と唇栓についてもすでに紹介したので、ここではとりあげない [和田 1979a, 1981]。ただし、すでにコンコンバ族のクランとして位置づけられているガンガン族にもタンベルマ族と同じ唇栓の文化があることを指摘しておきたい。傷痕や刺青の風習は、アフリカ全域に広がっていて、かならずしもパレオニグリティックの特徴的な身体変工ではない。だが、トーゴでは、古代ラマ族の文化領域に集中的にみられるところに両者の結びつきが暗示されている。

傷痕や刺青も第一次的にはクラン標識である。北部トーゴでは、同族の表象をもたない人間を捕獲して奴隷として売り渡すこともおおびらに行われていた。B. マルティネリによると、カブレ族は奴隷を売って粗鉄を入手していた [MARTINELLI 1982]。カブレ族はパレオニグリティックであるラマ族の真正な子孫であるが、自ら鉄を精錬した形跡がなく、鉄はもっぱらバッサリの製鉄所から輸入していた。だが、鍛冶業は盛んであった。ふいごはヤギ皮でつくった一對の袋で交互に手で押して送風する「皮ふいご」であり、羽口は筒が2つの「複式羽口」である。カブレ族は農耕を園芸的に集約したので農具の種類をふやし、カブレ式と呼ばれる円盤型やハート型の独特な形態の鋏も製作するようになった。鋏の他、鋤、鎚、掘り出し、手斧等が製作され、バッサリ族やコンコンバ族の鍛冶師と並んで、西アフリカでは有数な鉄製品の生産地になった。また、カブレ族やランバ族では土器製作も盛んで、容器はひょうたんより、むしろ土器によってまかなわれていた。技法は「積み上げ」で、カブレ族では内側のみカーボンを付着させる黒陶も製作された。なお、カブレ、ランバ、モバ等の諸族の土器製作の詳細な技術誌は共同研究員森淳氏によって報告されているので、そちらを参照されたい [森 1987a, 1987b]。

以上北部トーゴのパレオニグリティック山地民の技術誌を巨視的な観点から、比較検討して問題点を指摘してきた。せまい地域に封入されたパレオニグリティックが山地民として、最大限に生きようとしたことが農耕の集約化に向い、適切な技術の発達をうながしたのであり、また同時に、古代アフリカ的な文化要素を温存持続させたのである。アタコラ連山には、北部草原や南部森林地帯に成立した諸王国の支配や圧迫をのがれて、多くの避難民が流入した。その結果、南部のバナナやヤム等の重要な植物が移植され、農作物の種類は平地民とのあいだにそれほどちがいはなくなった。マードックの提唱するヤム・ベルトはこの頃からすでに、かなり北部へ広がっており、塊根作物もアタコラ山地民の主要な食糧になりつつあったのである。

1955年頃からパレオニグリティック山地民は、植民地政府の行政指導により、衣類の着用が推進された。他方、かれら自身もヨーロッパ文明の浸透により、自主的にシャツやズボン、あるいはイスラム風衣裳を着用するようになった。女性も腰から下をあらわにすることはなかった。そして1963年、カブレ族出身のエアデマ大統領が政権を奪取してからは、北部の開発が著しく進み、パレオニグリティックの文化は大きく変容した。だが、それにもかかわらず、パレオニグリティック山地民の文化は、南部のクワ語系諸族の文化とは同質ではない。今後、そうした文化細目の検討は、つぎの機会に発表する所存である。

付 記

本稿は、昭和57年度、昭和59年の文部省科学研究費補助金による海外学術調査「熱帯アフリカにおける物質文化の比較民族誌的調査」（代表者 国立民族学博物館 和田正平・課題番号 57041062 59041068）から得られた民族誌資料に基づき執筆されたものである。調査の実施にあたり、トーゴでは国立科学研究所 (Institut National de Recherche Scientifique) の協力を得た。所長 Kounoutche Sossah 氏に深く感謝の意を表したい。

文 献

- BAUMANN, H. and D. WESTERMANN
1957 *Les peuples et les civilisations de l'Afrique*. Paris: payot.
- BARROS, P. L. de
1986 Bassar: A Quantified, chronologically controlled, Regional Approach to a traditional Iron Production Centre in West Africa. *Africa* 56(2): 148-173.
- カナール, J. シュレ
1964 『黒アフリカ史 その地理・文明・歴史』 野沢協訳 理論社。
- CORNEVIN, R.
1969 *Histoire du Togo*. Paris: Berger-Levrault.
- DELVAL, Raymond
1980 *Les Musulmans au Togo*. Paris: Publications orientalistes de France.
- 江口一久
1978 『アフリカ最後の裸族』 大日本図書。
- FROBENIUS, L.
1913 *Und Afrika Sprach*, vol. III, *Unter den unstraeflichen Aethiopiern*. Vita, Berlin-Charlottenburg.
- FROELICH, J.-C.
1949a Généralités sur les Kabrè du Nord-Togo (1). *Bul de IFAN*, pp. 77-105.
1949b Les Sociétés d'Initiation chez les Moba et les Gourma du Nord-Togo. *Journal de société des africanistes*, pp. 99-127.
1950 Notes sur Naoudeba de Nord-Togo. *Bul de IFAN*, pp. 101-121.
1954 *La tribu Konkomba du Nord Togo*. Dakar: IFAN.
1964 Les problèmes posés par les refoulés montagnards de culture paléonigritique. *Cahiers d'études Africaines* 14: 383-399.
1968 *Les montagnards paléonigritiques*. Paris: Berger-Levrault.
- FROELICH, J.-C., P. ALEXANDRE et R. CORNEVIN
1963 *Les populations du Nord-Togo*. Paris: Presses Universitaires de France.

- ガルデイ, R.
1960 『秘境マンダラ 最後の裸族』 大久保和郎訳 二見書房。
- GARDI, Rene
1969 *African Crafts and Craftmen*. Canada: Van Nostrand Reinhold Company.
- HERSKOVITS, M. J.
1924 A Preliminary Consideration of the Culture Areas of Africa. *American Anthropologist* 26: 50-63.
1967(1945) *The Backgrounds of African Art*. New York: Biblo and Tannen.
- 川田順造
1979a 「サバンナのすまい1」 『月刊百科 No. 202』 平凡社, pp. 30-44。
1979b 「サバンナのすまい2」 『月刊百科 No. 203』 平凡社, pp. 6-11。
1979c 「サバンナのすまい3」 『月刊百科 No. 204』 平凡社, pp. 20-25。
1979d 『サバンナの博物誌』 新潮選書。
- LHOTE, H.
1958 *A la découverte des fresques du Tassili*. Paris: Arthaud.
- MARTINELLI, BRUNO
1982 *Metallurgistes Bassar*. Lome: Universite du Benin.
- MAUNY, RAYMOND
1947 Un Rout Prehistorique a travers le Sahara. *Bul de IFAN*, pp. 341-357.
- MERCIER, P.
1954 Cartes Ethno-demographique de l'ouest African. *Feuilles No. 5, IFAN*.
- MORGAN, W. B. and J. C. PUGH
1964 *West Africa*. London: Methuen & Co. Ltd.
- 森 淳
1987a 「北部トーゴ, ニャムトウグ周辺の土器について—成形法を中心に—」 和田正平編著 『アフリカ 民族学的研究』 同朋舎, pp. 849-868。
1987b 「北部トーゴ, モバ族の土器製作技法とその使用法について」 和田正平編著 『アフリカ 民族学的研究』 同朋舎, pp. 869-889。
- MURDOCK, G. P.
1959 *Africa Its Peoples and Their Culture History*. New York: McGraw-Hill Book Company, I.N.C.
- 中尾佐助
1969 『ニジェールからナイルへ 農業起源の旅』 講談社。
- ポランニー, K.
1975 『経済と文明』 栗本慎一郎, 端 信行訳 サイマル出版会。
- RIEFENSTAHL, L.
1976 *The Last of the Nuba*. London: William Collins Sons & Co Ltd.
- SASSOON, Hamo
1967 New Views on Engaruka, Northern Tanzania. *The Journal of African History* VIII: 201-217.
- TART, David
1961 *The Konkomba of northern Ghana*. London: Oxford Univ. Press.
- 和田正平
1979a 「タンベルマ族の土の城」 『季刊民族学』 10: 30-42。
1979b 「国立民族学博物館 西アフリカ 学術調査概報」 『国立民族学博物館 研究報告』 4(3): 525-542。
1981 「成女式への関門」 『月刊みんぱく』 5(9): 15-17。
1982 「黒いアフリカの皮膚装飾—傷痕, 刺青, ボディ・ペインティング—」 『化粧文化』 6: 12-27, ポーラ文化研究所。
1987a 「タンベルマ族の岩形住居—建築技術と住居空間—」 和田正平編著 『アフリカ 民族学的研究』 同朋舎, pp. 631-656。
1987b 「スーダン・サバンナ帯における生業形態の特質—半農半牧タンベルマ族の事例—」 和田正平編著 『アフリカ 民族学的研究』 同朋舎, pp. 1033-1069。
1987c 「トーゴの鉄ものがたり」 『同朋』 108: 2-4, 同朋舎。